# 第七講　論理的文章の読解⑦

## Step 1

**一**　次の文章を読んで、あとの㈠から㈥までの問いに答えなさい。

1　鳥は、本当に自由なのだろうか。私はそうではないと思う。鳥はいわば空の中に閉じこめられている。魚も同様で、水の中に閉じこめられている。鳥は空を「空」とは呼ばず、魚も水を「水」と名づけることはない。人間がするようには自分の住む世界を対象として捉えることがないからだ。人間は言葉を用い、空を「空」と呼び、海を「海」と名づけた。いわば世界と自分をはっきりと分けて認識している。その意味で人間は、世界に閉じこめられてはいない。言い換えれば人間は、鳥や魚と同じような意味では「自然（＝世界）」の中に生きていない。おそらくこのことが、人間、とりわけ若い皆さんが①世界と自分との間にズレを感じる理由だ。

2　重要なことは、このズレがあるからこそ、人間はほかの動物のように②自足することができず、自分が生きる世界を絶えずつくり替えていかなければならないということ。例えば、森を切り開き、田畑をつくる。これこそ人間だけが持っている自由であり、人間が自由である証（あかし）なのだが、見方を変えれば、その自由に閉じこめられているともいえなくはない。人間は、自分が生きている世界と自分との間に越えがたいズレを感じながら、自由に、世界を学び、世界を自分に合うようにつくり替える努力を積み重ねてきた。それが歴史ということ。私たちは今、その結果としての世界を生きているのだ。

3　しかし③現代において、人間が行っている世界のつくり替えは、あまりにも高度で複雑だ。例えば、地下鉄を通したり、ジェット機を飛ばしたりしているが、そのために何が必要かを挙げてみればわかる。まず、言葉を知らなければならない。世界の仕組みを理解して記述するには、数学がなければならない。物理学も工学も欠かせない。いくつものことを積み重ねて、ようやくジェット機が一機、

空を飛べる。そうした数学や物理学、工学は、自然そのものではなく、人間が自然を学びながらつくり出した体系であるから、学ぶことには二段階あることになる。星の運行から暦をつくり、めぐる季節の知識を生かした耕作や狩猟を行うなど、自然を学ぶことが第一段階だとすれば、自然を学んだ人間がつくり出したものを学ぶことが第二段階だ。現代を生きる我々には、この「二重の学び」が宿命づけられており、この第二段階のために特に必要とされているのが学校ということになる。

[4] 人間がつくり出したものは数えきれず、一人では到底学びきれない。人間は学ぶべきことを増やしすぎたのではないかと思うほどだ。研究分野の細分化も近年ますます進行している。（中略）たしかに、何をするにせよ勉強して覚えるべきことは多い。何か新発見をするほどの研究者になりたいのであればなおさらだ。しかし知識量で勝る者が強者かというと、現実はそうなっていない。実は新発見というものは、発見者が十五〜十六歳の頃からその種を自分の中に宿していることが多い。つまり、あなたたちの年に何かの種が宿されるということ。これは分野によらない。このことが端的に示しているのは、世界を変える力は知識ではなく「若い力」だということだ。「若い力」とは④「知らない」力であり、「知っている」ということよりも「知らない」ということのほうが重要なのである。

[5] 理由の一つがエラー、つまり失敗する可能性だ。膨大な知識の体系に分け入った若者は、それを骨肉化しようとするとき、誤った理解をすることもしばしばある。物事は、教えられたとおりに学ぶとは限らないからだ。新発見は、それまでの常識からすればエラー、あるいはアクシデントと呼ばれる事態の中でなされることが多い。人間が何かを成し遂げる力は、エラーにこそある。歳（とし）をとると失敗を恥じるようになり、エラーを起こせなくなっていくが、エラーを恐れてはならない。若さとは、弱点であると同時に世界を変えていく力でもあるのだ。

[6] 物理学者のある友人は、高校で教わった虚数単位が大人になってもずっと頭にひっかかっていたという。虚数単位は－1の平方根だと説明されても「よくわからない。気持ち悪い。なんかおかしい」という思いを、彼は長い間、頭の片隅に置いておいた。三十年後、彼はその虚数を利用してまったく新しいタイプの電子顕微鏡を発明するのだが、皆さんの年頃に抱いたほんの少しの違和感と疑問を持ち続け、それが花開いたのだという。

[7] 「知らない」ことは大きな力にもなりうる。エラーをする可能性はおおいにあるが、それは、誰も考えつかなかったことを行う可能性でもある。学校では「間違えてはならない」という雰囲気が形成されがちだが、それは世界を変える力を逆に失わせてしまうことにな

るかもしれない。

（小林康夫「学ぶことの根拠」〈中学生からの大学講義1「何のために『学ぶ』のか」所収〉より）

（注）○1～7は段落符号である。
○体系＝一定の原理に基づいて組織された知識の全体。
○骨肉化＝ここでは、自分のものにすること。
○アクシデント＝思いがけない出来事。

㈠ ①世界と自分との間にズレを感じる理由とあるが、その説明として最も適当なものを、次のアからエまでの中から選んで、そのかな符号を書きなさい。

ア　人間は自分と自分が住む世界とを明確に分けて理解していること
イ　人間は鳥や魚のように単独では世界の中で生きていけないこと
ウ　人間は自分の住む世界を思いどおりにはつくり替えられないこと
エ　人間は昔から自分の住む世界の中で違和感を抱き続けていること

(二)　②自足の意味として最も適当なものを、次のアからエまでの中から選んで、そのかな符号を書きなさい。

ア　自由自在に動き回ること　　イ　不足がないか自ら確かめること

ウ　現状に自ら満足すること　　エ　自分の力で成長していくこと

(三)　③現代において、人間が行っている世界のつくり替えは、あまりにも高度で複雑だとあるが、その説明として最も適当なものを、次のアからエまでの中から選んで、そのかな符号を書きなさい。

ア　現代では、飛行機や鉄道などの大型の機械をつくるために、技術開発に加えて世界中から資源を集めてくる必要があるということ

イ　現代では、新発見や技術開発を行うために、昔の人間とは比較にならないほど多くのことを自然から学ぶ必要があるということ

ウ　現代では、人類の歴史を今後も積み重ねていくために、言葉によって世界の仕組みを記述し後世に伝える必要があるということ

エ　現代では、新しいものをつくり出すために、これまで人間がつくり出してきたさまざまな学問体系まで学ぶ必要があるということ

(四)　④「知らない」力とあるが、知らないことが力になるのはなぜか。その理由を述べている一文を、第六段落以降の文章中からそのまま抜き出して、始めの五字を書きなさい。

㈤　この文章の表現の特徴として最も適当なものを、次のアからエまでの中から選んで、そのかな符号を書きなさい。

ア　想定される反対意見に対して複数の根拠を挙げて反論し、最後に自分の意見を明らかにすることで、文章に説得力をもたせている。
イ　最初に常識に反する見方を示して読者の注意を喚起し、それを裏付けるデータを列挙することで、文章に説得力をもたせている。
ウ　主張を述べた後で分かりやすく説明を加えたり、根拠となる具体的な事例を示したりすることで、文章に説得力をもたせている。
エ　自分の考えのもとになった研究者の見解を詳しく紹介したり、自分の体験を語ったりすることで、文章に説得力をもたせている。

㈥　この文章の内容として最も適当なものを、次のアからオまでの中から選んで、そのかな符号を書きなさい。

ア　若い頃に間違えて記憶した内容は、後の新発見を導く原動力となる。
イ　若い頃に抱いた違和感や疑問は、将来の創造の種となることが多い。
ウ　世界を変える力は、知らないことを恥じる気持ちによって高められる。
エ　知らないことによる失敗は、常識が身に付くことで減る場合も多い。
オ　世界を変えていく力をもつ人間は、最初から常識を信用していない。

【愛知県】

## Step 2・3

## 二

次の文章を読み、問い(1)～(9)に答えよ。(1～5は、各段落の番号を示したものである。)

1　しばらく前に、石川県のとある公立高校で、「考える」ということについて、生徒さんたちに向けて語ったことがある。講演を聴いたひとりの女子生徒が書いてくれた感想文のなかにこんな文章があった――
「哲学は、人間の本質について深く疑問に思った時や、そのことによって悩んだり傷ついたりした時に、それを解決する手がかりをつかむための一つの手段なのではないか、と思いました。」

2　さっと読んだかぎりでは哲学についてのa よくありそうな印象を記しているようにみえるが、そのなかのある言い回しにわたしの眼(め)は釘(くぎ)づけになった。b「解決する手がかりをつかむ」という箇所だ。問いに対する答えではなく、その「手がかり」を摑(つか)むために哲学があるらしい、というのである。

3　政治や経済においても、育児や介護にあっても、さらには芸術表現に際しても、不確定な状況のなかでどうするのがよいのかわからないまま、とりあえず事に当たるほかない。正しい答えが一つだけあるわけではないし、みなをc 満足させられる答えがあるわけでもないし、そもそもこれからじぶんが知ろうとしていること、創ろうとしているものがあらかじめわかっているわけでもない。答えがすぐには出ない、あるいは答えが複数ありうる、いや答えがあるかどうかもよくわからない、そんな問題群がわたしたちの人生や社会生活を取り巻いている。そんなときにたいせつなことは、わからないけれどこれは大事ということを摑むこと、そしてそのわからないものにわからないままに正確にd 対ショできるということ、いいかえると、性急に答えを出そうとするのではなくて、答えがまだ出ていないという無呼吸の状態にできるだけ長く持ち堪(こた)えられるような知的耐性をe 身につけることだ、というふうな話をしたのだが、聴いた生徒さんがそれをこんなふうにまとめてくれるとは想像もしていなかった。そしてとてもすてきな捉え返しだとおもった。というのも、哲学の重要な仕事として、問いの構造じたいを問いなおすということ、問題となっていることがらへの視点、ないしはアプローチの仕方を吟味するというところがあるからである。

4 ひとには「なぜ？」と、どうしても問わずにいられない瞬間がある。なぜじぶんの生活というのはいつもこうでしかありえないのか。この息苦しさの理由は何か。あるいは人びとのあいだで、あるいは時代のなかで、どんな方向に進んでいけばいいのか。時代がなにか大きく変わりつつあるような気配がぼんやりとあるが、いったい何が起こりつつあるのか。その動きになにか、軸とか構造とかいったものが見いだせるのか……。そういう問いがしばしば頭をもたげる。時代の空気への抑えがたい不安や違和感に、時代はなにかとんでもない方向に動きだしているのではないかと、問いを投げ返したくなるときもある。つまり問えば問うほど問いは増殖していって、ついに、これまでじぶんが、あるいはじぶんを取り巻く人びとが、f<u>それ</u>を下敷きにしてみずからの生の軌跡を描いてきたその《初期設定》、あるいはじぶんがこれまで属してきたその社会が依拠する《フォーマット》に、歪み（ゆが）なりボタンの掛け違えなり不都合なりがあったのではないかと、それらを根本から再チェックしたくなる瞬間がある。そして、じぶん（たち）の生をそれに照らして理解するその《初期設定》や《フォーマット》をあらためて意識の組上（そじょう）にのせ、吟味し、場合によってはそれを書き換えることで、より見晴らしのよい（ただし、かならずしも心地よいとはかぎらない）場所に立てるようになること、g<u>そのプロセス</u>として哲学はある、はずだ。

5 「哲学とはおのれ自身の端緒がたえず更新されてゆく経験である」——人生の《初期設定》、あるいは社会生活の《フォーマット》をあらためて問いなおすことを、モーリス・メルロ＝ポンティはそのように表現した。「おのれの端緒がたえず更新されてゆく」というのは、それまであたりまえの前提であったことが崩れる、不明になるということである。いいかえると、問うなかで、問いが解消するどころか、逆に増殖してゆくということ、いってみれば問いじたいにある種の地殻変動が起こるということである。その意味で、哲学はとりあえずの解答を得るためのマニュアルではありえない。前提そのものを問いただそうというのだから、問題解決の「手がかりをつかむ」という、あの女子生徒が書いていたプロセスには、既定のマニュアルなどありえないのである。まずは問いのなかに飛び込むこと。以降のプロセスを歩み抜く知的耐性は、問いを問いつづけるなかではじめてついてくる。

（鷲田清一（わしだきよかず）「哲学の使い方」より）

注
○アプローチ…対象に接近すること
○フォーマット…型式
○俎上にのせ…対象としてとりあげ
○プロセス…過程
○端緒…物事のはじまり
○モーリス・メルロ＝ポンティ…フランスの哲学者

Step 2

(1)　本文中のａよくと意味の異なるものが、波線部（～～）に用いられているものはどれか、次の(ア)～(エ)から一つ選べ。

(ア)　夜空を眺めたくなって、僕らは星がよく見えそうな丘を目指して歩いた。
(イ)　彼女の話はよく聞くような内容だったが、その表情が私の心を動かした。
(ウ)　誰もがよくするような失敗をしても、そこから学べることはさまざまだ。
(エ)　古い日本映画によく出てきそうな民家で、彼は静かに暮らすことにした。

Step 2

(2) 本文中のb「解決する手がかりをつかむ」について、筆者がこの表現に注目した理由を説明したものとして、最も適当なものを、次の(ア)～(エ)から一つ選べ。

(ア) 哲学を、問題に対する唯一の答えを出すものではなく、複数の答えがあることを知るためのものだと捉えた表現であり、筆者が哲学の重要な仕事だと考えていることを、期待以上の言葉で表していると感じたから。

(イ) 哲学を、問題を解決するものではなく、問題そのものを問いなおしたり問題に対する姿勢を考えたりするものだと捉えた表現であり、哲学についての筆者の考えを、思いもよらない言葉で表していると感じたから。

(ウ) 哲学を、身近な問題を解決する方法ではなく、人間の本質についての問いに答えるものだと捉えた表現であり、筆者が考えている哲学の重要性を、自分なりの言葉で見事に表していると感じたから。

(エ) 哲学を、疑問に答えるものではなく、答えを求めながら疑問そのものを深めていくものだと捉えた表現であり、哲学について筆者が思いもよらなかった考えを、わかりやすく的確な言葉で表していると感じたから。

Step 2

(3) 本文中のc満足の熟語の成り立ち（構成）を説明したものとして最も適当なものを、次のⅠ群(ア)～(エ)から一つ選べ。また、c満足と同じ成り立ち（構成）の熟語として最も適当なものを、後のⅡ群(カ)～(ケ)から一つ選べ。

Ⅰ群
(ア) 上の漢字と下の漢字が似た意味を持っている。
(イ) 上の漢字と下の漢字が主語と述語の関係にある。
(ウ) 下の漢字が上の漢字の目的や対象を示している。
(エ) 上の漢字と下の漢字の意味が対になっている。

Ⅱ群
(カ) 握手　(キ) 洗浄　(ク) 年少　(ケ) 是非

Ⅰ □　Ⅱ □

Step 2

(4) 本文中のd対ショの片仮名の部分を**漢字**で書け。

対□

Step 2

(5) 本文中のe身につけることだの主語は、本文中の二重傍線部（‖）のうちどれか、最も適当なものを、次の(ア)～(エ)から一つ選べ。

(ア) たいせつなこと　(イ) これ　(ウ) 答え　(エ) 知的耐性

□

Step 2

(6) 本文中のfそれの指す内容として最も適当なものを、次の(ア)〜(エ)から一つ選べ。

(ア) じぶん　(イ) じぶんを取り巻く人びと

(ウ) 《初期設定》　(エ) 《フォーマット》

Step 3

(7) 本文中のgそのプロセスについて説明したものとして最も適当なものを、次の(ア)〜(エ)から一つ選べ。

(ア) じぶんや社会についての疑問を抱いて不安や違和感を感じるなかで、《初期設定》や《フォーマット》に原因がないかどうかを点検し、その原因を明確にすることで、不安や違和感を解消しようとするプロセス。

(イ) じぶんや社会についての疑問を抱いて問いを投げ返すなかで、《初期設定》や《フォーマット》を意識の対象としてとりあげて点検し、そのうえで問題を問いなおすことで、時代の変化を明らかにしようとするプロセス。

(ウ) じぶんや社会についての疑問を抱いて問いを深めるなかで、《初期設定》や《フォーマット》についてよく考えたり新しく置き換えたりし、そのうえで問題を捉えなおすことで、問題を明確にしようとするプロセス。

(エ) じぶんや社会についての疑問を抱いて問いが増殖するなかで、《初期設定》や《フォーマット》に問題がないかどうかを考え、その問題を解決することで、じぶんや社会の歪みを解消しようとするプロセス。

Step 3

(8) 本文の段落構成を説明した文として**適当でないもの**を、次の(ア)〜(エ)から一つ選べ。

(ア) [1]・[2]段落には、本文全体で扱う話題を取り上げるきっかけとなったできごとが書かれている。

(イ) [3]段落には、[1]・[2]段落のできごとがあってから、筆者が哲学について考えはじめた内容が主に書かれている。

(ウ) [4]段落には、[3]段落の内容を受けて、哲学とはどういうものかという説明が書かれている。

(エ) [5]段落には、引用を交えながら、[1]〜[4]段落のまとめとなる内容が書かれている。

Step 3

(9) 次の〈ノート〉は、本文を学習した哲郎さんが、本文の[5]段落のまとめとして書いたものの一部である。これを読み、[X]に入る適当な表現を、本文の内容をふまえて、**三十字以上、四十字以内**で書け。

〈ノート〉

[5]段落のまとめ

① モーリス・メルロ＝ポンティの言葉
「哲学とはおのれ自身の端緒がたえず更新されてゆく経験である」

② 筆者の解釈
「おのれ自身の端緒がたえず更新されてゆく」とは
・前提であったことが崩れたり不明になったりすること。
・問うなかで、問いが解消するどころか、逆に増殖してゆくこと。
・問いじたいにある種の地殻変動が起こること。

③　筆者の主張

「その意味で、哲学はとりあえずの解答を得るためのマニュアルではありえない」とは

・哲学とはおのれ自身の端緒がたえず更新されてゆく経験であるという意味で、哲学は問題に対する答えを出すためのマニュアルにはなりえないということ。

④　まとめ

・問題解決の「手がかりをつかむ」というプロセスは、［X］ため、まずは問いのなかに飛び込み、自分なりに考えることが大切である。そのために必要な知的耐性は、問いを問いつづけるなかではじめてついてくる。

【京都府】

〈Note〉

# 第七講　論理的文章の読解⑦

## Step 1

### 一

**解答**

㈠ア　㈡ウ　㈢エ　㈣エラーをす　㈤ウ　㈥イ

**解説**

㈠この文の「このこと」は、人間が「世界と自分をはっきりと分けて認識している」こと、「言い換えれば人間は…『自然（＝世界）』の中に生きていない」ことをさしている。

㈢「地下鉄」や「ジェット機」の例で、「言葉」や、「数学」「物理学」「工学」など「人間が自然を学びながらつくり出した体系」を学ばなければならないと述べていることに着目する。

㈣第六段落で「物理学者のある友人」のことを取り上げたあと、第七段落で、「知らない」ことがもたらす「可能性」を挙げて、「大きな力にもなりうる」としていることをおさえる。

㈤「『若い力』とは『知らない』力であり…『知らない』ということのほうが重要なのである」という意見を述べたあと、その理由や、友人の例などを挙げて、筆者の主張が分かりやすく伝えられている。

㈥第四段落で、「新発見というものは…十五〜十六歳の頃からその種を自分の中に宿していることが多い」として「若い力」を取り上げ、第六段落では、「皆さんの年頃に抱いた…違和感と疑問を持ち続け、それが花開いた」具体例として「物理学者のある友人」を取り上げ、「知らない」ことの重要さを説いている。

Step 2・3

二

**解答**

(1)(ア)　(2)(イ)　(3)Ⅰ、(ア)　Ⅱ、(キ)　(4)(対)処　(5)(ア)　(6)(ウ)　(7)(ウ)　(8)(イ)　(9)前提そのものを問いただそうとするものであり、既定のマニュアルなどありえない(37字)(同意可)

**解説**

(1)頻度が高い、しばしばあるという意味で使われている。十分に、という意味で使われているものと区別する。

(2)筆者は、「問いの構造じたいを問いなおす…アプローチの仕方を吟味する」ということを「哲学の重要な仕事」と考えている。講演を聴いた生徒が、「問いに対する答えではなく、その『手がかり』を摑むために哲学があるらしい」と捉え、筆者が「想像もしていなかった」表現でまとめていたことをおさえる。

(3)「満」は満ちる、「足」は足りるという意味である。(カ)の熟語は(ウ)、(ク)は(イ)、(ケ)は(エ)の成り立ちである。

(5)主語は「何が」「何は」にあたる文節。「そんなときにたいせつなことは」が主部で、「わからないけれど…摑むこと」「そのわからないものに…対ショできるということ」をあげ、最後に「いいかえると」として、「性急に答えを…知的耐性を身につけることだ」と結論づけている文である。

(6)じぶんが「下敷きにしてみずからの生の軌跡を描いてきた」、その基となるものを指している。

(7)「じぶん(たち)の生を…《初期設定》や《フォーマット》」を「吟味」し、「書き換える」ことで、「より見晴らしのよい…場所に立てるようになる」ことを表している。ここでの「より見晴らしのよい」とは、問題がよく見える状態を表していることをおさえる。

(8)3段落には、1・2段落であげられた、「解決する手がかりをつかむ」という表現に筆者が注目した理由が述べられている。

(9)「その意味で…マニュアルではありえない」という筆者の主張をふまえて、その後の「前提そのものを…ありえないのである」の部分をまとめる。